

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(4)



中村周平

今回は、事故後搬送された病院での半年間の入院生活について触れていきたいと思います。手術によって怪我自体(骨折)は治っていく中で、当初は障害も徐々に無くなっていくのではという期待を持っていました。しかし、その期待は時間の経過と共に葛藤へと変わっていきます。また、両親は障害を負った息子と「24時間向き合う」生活がスタートすることに。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」、「両親へのインタビュー」で交わされた会話の内容を手がかりに、当時の私と両親の心境についても書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=I、父親=T、母親=Hとする。

3 入院生活前期

1) 「障害」の認識と葛藤

「首の骨が折れたら死ぬか、良くても障害が残る」、そのことを知らないわけではありませんでした、当時は自分の状態とつなげて理解することはできませんでした。「なんでこんなことになってしまったのか」それがわからないまま、ベッドに寝かされたままの日々が続きました。しかし、まったく動かない体も徐々に治っていくものと考えていました。

I: 「何日か後の病室になるわけや。それで、これはやばいことになったとかあるいは体が麻痺しているみたいな。それは事故の瞬間に理解しているわけ？」

S: 「そうですね、麻痺って言う言葉かどうかは分かりませんが、動かない…」

I: 「大変なことになったということがその場で分かっていた？」

S: 「分かっている。(中略)最初は目が覚めたら集中治療室で、自分の正面に友達の寄せ書きがおいてあって。たまたま事故の一週間後が誕生日だったんですよ。誕生日おめでとうっていう色紙と、元気になってくださいっていうお見舞いみたいな感じの色紙が置いてあって。それ読んだときに、また、首を鍛えて頑張ってくださいとか、僕もそれを読んで違和感がなかった。最初は手の骨や足の骨が折れた感じで一時的に体が動かへんけど、治るんちゃうかなみたいな、でもこんな怖い思いをするのも嫌やし、ちょっと骨がくっつくまで時間かかるかもしれんから、もしかしたら現役は退かなあかん、マネージャーみたいなことをしなあかんのかなって。そんなに深い意味はなくて、Aチームとして頑張っていけへんと思うし、もしやるんやったら、ずっとBチームでやるんやったら、もっと別の形で。なんかしょうもないことばかり考えてましたね」

I: 「ある程度は回復すると。元の状態として現役の選手になれへんかも分からないけどマネージャーぐらいやったらやれるんちゃうかと。というふうな認識やった？そんながだんだん変わっていくわけ？だから最初は治ると思ってた？」

S: 「最初は自分にもうちょっと勇気があればラグビーできるかな、ぐらいの気持ちでした」

「せっかく新チームがスタートして、自分たちの代がやっと来た。ホンマにこれからだっていうのに」。自分の障害やこれからのことより、ラグビーができない悔しさを感じていたことを覚えています。

ただ、時間が経つにつれ、これがただの怪我ではないのでは、という不安に襲われていくようになります。5年間のラグビー生活で鍛えた体は見る間に骨と皮だけになり、お尻は尾てい骨が飛び出ているように見えるほど痩せ細っていきました。また、自律神経も傷つけてしまったことで、それまで頭で考えなくても体がやってくれていた機能にまで、障害があらわれるようになりました。

I: 「それが、だんだん現実が分かってくるみたいな過程があるわけや？」

S: 「僕自身いつか治るんちゃうかな？というところから、時間が経つにつれて、体はどんどん細くなっていくのに、体は全く動かへんし。首の骨がくっついてから、車いすに座る訓練とか始まったんですけど…初めはベットに座る練習やったんかな？座ったら血圧が下がるんですね。がくと。ベットをちょっと起こしただけでも血圧下がって気を失ってしまったりもあって。首を痛めたときに自律神経も痛めてしまって。自分が頭で考えんでも、体がやってくれる神経で血圧の安定も自律神経がやってくれてるらしいんですね。だから立ったり座ったり寝たりしたときに立ちくらみとかあるじゃないですか。そういうのを自律神経の過反射ではないですけど、体が勝手にやってくれてることで座ったときから立ったときぐっと血が下に下がるのを止めてくれるのが自律神経の役割、それを傷めるから、寝てる状態から座った状態になっても血圧を止めてくれないので、で一んと下がってもぼてっと気を失ってしまうということがあったり…」

I: 「最初は座れへんでしょ？自分の座位を保持するだけのあれがないんで。今はもう座れんの？」

S: 「座れないです。車椅子じゃないと。最初は車いすもストレッチャーだったんですけど、足伸ばして、

半ベットみたいなあれで、最初 10 分かな？病棟のナースステーションまで行って帰ってくるっていうのが 1 ヶ月くらい」

I: 「そこら辺でぼつぼつ、まずいぞと？」

S: 「これは変やと思いましたね。普通のケガじゃないんじゃないか？って。もしかしたら障害が残ってしまう。でもここまできつもんやという認識はまだなかったですね。(中略)ちょっとずつ回復するんちゃうか？と。車いすになっても下半身麻痺でも上半身動く人いるじゃないですか、脊髄の場所の関係で。なにかしらもっと動いていくんじゃないのかと思っていました」

I: 「手ぐらいはもどるかな？」

S: 「まだ走れはせんけど、歩けるぐらいにはなるんかと、それがどンドンこう目標位置が下がってききましたよね。走る、歩く、立つ、もしかしたらこれってどうなるんやろみたいな」

良くなるどころか痩せ衰えていく私の体と機能。「明日になればどこかに反応が」「たとえ走れなくても歩けるようには」と思うことで不安を紛らわしていました。

そして、事故直後は精神的な部分で追いつめられていましたが、私と両親にとって、むしろ集中治療室を出てからこそが、本当に大変な時期の始まりでした。一般病棟に戻った初日の夜、病院から夜間の付き添いは断られてしまったために夜 8 時には母親が帰らなければなりませんでした。

S: 「集中治療室に 17 日間いて、その後一般病棟にでていくやんか。降りてきたその日は、一般病棟に（付き添いが）つけないということで、帰ってしまったのがあったんやけど、(中略)病院が 24 時間看護といながら、なかなかつかへん現状があるのもそうやったんけど、精神的に僕が、ひとりになることに耐えられなかったのちゃうかな？ナースコールも押せなかったけど」

H: 「すごい不安やったと思う。一般病棟に行った時、そしたら帰るわって言ったら舌打ちするやん。で、どうしたって言ったら、ほんとになんでもないことで呼び返すや」

S: 「顔かいてとか」

H: 「多分そういうことやったと思う。ほな行くわなっとなっていうねんけど、ドアの所まで行くと、チッチッって舌がなるんやわ。最後に『一人がいやなんか』っていうと、『うん』って。『せやけど、付き添いがあかんって言われてるしな』って。一応それで『うん』っていうねんけど、またチッチッってなるんやわ。泣きながら廊下走って行ったの覚えてる。ナースの詰所で、『すごい不安がってるので、今晚頻繁に見てやってください』って。一階まで行ったけど、そこで動けないようになって、涙が出て、涙が出て。その日に帰って、やっぱりこれはあかんわって。私らが、もたへんかった、不安で。次の日から付き添いを申し出たら書類一枚で」

S: 「大変じゃなかった？家から東福寺まで小一時間かかるやんか？」

H: 「誰もいない時に、何か起きてるんじゃないかっていう不安よりは、そばにいるほうが、親もきっと安心してたんやと思うわ」

何一つできない体で一人になることに大きな不安を感じていた私と、その不安を少しでも和らげたいという両親。そして、翌日から両親が交互に病室に泊まりこむ生活になった。

S: 「その間、病院にいてもらいながら、片方は家で、家事やこれからのことをやってくれてたと思うんやけど…でも病院でほとんど起きてくれてたから、もしかしたら寝るために家に帰ってたんかな？」

H: 「もちろん、家で仮眠をとって、その日の晩ご飯とかをして、途中からは、お弁当箱に入れて持っていくようになったよね、周平が病院のご飯食べられへんようになって」

S: 「暖かい弁当箱に入れてくれて、うどんとか食べてた気がするわ」

H: 「時々父が、あなたの大好きな、コンビニお弁当を持ってきてくれたりとか」

S: 「事故の翌日から、仕事をふたりとも休まなあかんようになったよね？」

H: 「迷ってる暇も躊躇している暇もなかった。とりあえず、すぐ職場に電話いれて『ごめんなさい、明日

から介護休とります』って」

事故の翌日からすでに介護休暇を申請、民間企業では数カ月が限界ですが、公務員であったことが幸いし長期の休暇が認められたことは、不幸中の幸いでした。

2) 学校側に対する期待

事故が起きた原因は全く分かっていませんでしたし、知りたいと思う時間も気持ちもありませんでした。「僕はこれからどうなる。ずっと病院？いつ帰れるの？体はどうなったの？」。どれだけ考えても答えが出ない問題ばかり頭に浮び、心の整理をするだけで精一杯の毎日でした。ただ、心のどこかで「あれだけ大きな事故やったんやし、誰かがしっかりやってくれているだろう」と、期待している自分がいた事も確かでした。

S:「最初親は病院に付きっきりで、僕も自分の体はどうなったか分からない状態で。事故のことは分らんっていう気持ちと、どっかでちゃんとやってくれてるやろっていうか、こんな大きな事故が起きたんやから当然なんで起きたんかは分かってくれてるやろうし、あんだけ部員の多いチームなのでまた同じことが起きひんようにとかは考えてくれてるやろと、どっかにそんな安心感みたいなものが当時あったような気がしますね」

I:「入院してる時に？」

S:「自分と同じように運ばれてくるメンバーがいるんじゃないかっていうのがすごく怖かったの。でも、そういう話無かったし、何かしら話し合いがあったんやろうと」

所属していたラグビー部は 70 人近い部員を抱えており、日々ハードな練習を繰り返していました。「自分に事故が起きたということは、今後も誰かが同じような事故に遭うかもわからない。そんなことは絶対無いようにしてくれるだろう」。誰かに責任を追求したいのではなく、「誰一人自身と同じ目に遭って欲しくない」というラグビー部の指導陣や学校側への私の思いでした。

そして、両親が学校側へ求めたのは、事故に対する責任追及ではなく、今回の事故を教訓として活かし「同じような事故を二度と起こしてほしくない」ということでした。事実、学校側の対応は決して万全なものとは言えませんでした。

S:「父、母が面会に来てくれて家を行ったりきたりしてるときに、学校の人とは結構頻りに連絡とったりしてたの？」

H:「その間はね、監督結構来てたし、その面会時間にあわせても来てくれてたし、逆に、学校のこともあるから『毎日じゃなくていいよ、他の生徒さんのことあるし』っていうぐらい。『僕が来たいんで来てるんですから』って来てはったなあ。監督がこれないときは部長が来てたりとか、コーチが来たりとか必ず誰かが来てはった。そのなかで学校のなかで起きた事故やんか、いくら故意にではなくても、監督陣を責める気持ちは全くなかったし。ただ、周平が怪我するだいぶ前に交通事故の賠償のニュースがあって、『もし生きてたらもらえるはずやったお金』人間の命ってこんなんして計算されるねんなって、むなしいなって話を周平としてた時もあつたし。周平の命をお金で換算して欲しいとは思わないけど、こんな事故ってまた学校で起きる可能性があるもんやから、今後の学校の対応の仕方を見せてもらいますって言うことを監督に伝えた。校長に『お金のことはいいですから、バリアフリーのことを望んでおられるんですね』って。で『裏の階段に手すりをつけようと思ってるんですよ』って言われたときに、ああ何もわかってない周平に起きたことを。そやし、まずは周平の体に何が起きたかをちゃんと理解してくれて。そのためには、そういう人が入ってる、リハビリ専門病院とかそういうところも見てもらえらいいのでっていう話をしたら、大原記念病院と兵庫の県リハを見に行かはって。『すごく素晴らしいところで、みんな希望を持って生活している』という感じの情報が入ってきて。そんなこと伝えてほしいんじゃないと。どういう状況になってその人達がリハビリをうけなあかんのかと、周平の負った障害をちゃんと理解してもらうために、見に行つて欲しいっていったのに、なんかこう、親は激怒したりとい

う場面があったりとか、事故に対する受け止めがとんでもチグハグやったっていうのが最初からあったよね」

学校管理職との連絡の不備や、「息子の障害」についての思いの違いに、事故直後の両親は理解に苦しんでいました。

しかし、両親は学校側と対立することはありませんでした。この事故で「争う」ということは何も生まないということをわかっていたようです。そして、何より両親は監督と同じく、日々多くの子どもらの命を預かる教員でした。

S:「それが気にならへんぐらい、いろんなことがいっぱいいっぱいやったというか」

H:「そうやね、もう事故の当初から監督陣というよりは、学校の首脳陣というか、校長とかって言う人の受け止め方が…周平を搬送するために救急車が入ってきたことも知らへんかったみたいで。そういうところの学校の危機管理体制というか、同じような職種にいるからありえへんことやよね、学校に救急車がきたことを管理職が知らないなんて。でも、それどころじゃなかった。集中治療室にいたときにいろんなことがあったんやけど、その間に肺炎起こして気管切開せなあかんかったりとかね。(中略)きつい薬が使われていて、意識が朦朧としていて。何日目やったか、友達のお父さんが、来てくれたときも周平の状態が今までになく悪かったというか、とりあえず声が出えへんねんけど、体を起こしてくれって言うのをしきりに訴えて、「僕はこんなことしてたらあかんねや」って。『前へ前へ』って言うんや『前に進まんと僕はだめになってしまう』って。なんか朦朧とした意識の中でそういうことを言ってるのを見て、友達のお父さんが激怒しはった。その時に『自分が想像したのと、周平の状態がぜんぜん違う、こんな体にされて、なんで黙ってるんや』って。その時に私らは『ラグビーで言えば、スクラムのあっちとこっち別れてではなくて、同じ側でスクラムを組んで周平のこれからを支援してもらうことをとったんや。敵対する関係ではなくて』という話を。『学校の先生やねえ、甘いね』って話をされた。その事故の当初、

父とはそんな話をしたね」

S:「僕は知らなかったけど、学校とチグハグは最初からあったけど、対立するような関係ではなくて、と、いうかなってほしくなくて、一緒にいてほしいという」

H:「争うことは望まへんかった。争うことで何かは前進するというのは思ってたこととか、部活動の指導というのはプライベートの部分もそこに注いで頑張ってくれてはる人たちというの、身近にたくさん見てきてたから。一概にそこで起きた事故やからそれを責めるっていうところからスタートしなかった。ほんまに泣き崩れるコーチ陣に『先生らのせいじゃない』って親が言った」

自分たちの周りにも、監督と同じように、私生活を犠牲にして熱心に部活動に打ち込む同僚を何人も目にしてきた両親。学校で、しかも部活動中に起きた事故について、誰かに責任を追求することは決して望まないということを感じていました。「同じ側でスクラムを組んでいて欲しい」、それが両親の一番の思いでした。